

日本膜学会会長に就任して



会長 岡村恵美子（姫路獨協大学薬学部）

この度、後藤雅宏会長の後を受け、日本膜学会会長を務めさせていただくこととなりました。ご承知の通り、日本膜学会は1978年に設立され、「膜」をキーワードに、人工膜・生体膜・境界膜を研究対象とする異分野の研究者が集う歴史と特色のある学会です。一方で、昨年（2020年）は日本膜学会にとって節目の年となりました。4月には法人化し、新たなスタートを切りましたが、同時に、予想もしなかったコロナ禍のなか、活動を見直さざるを得ない状況にも陥りました。今後しばらく、コロナと共生しながら学会活動をいかに継続するか、その方向性がさらに試され、対応が求められると予想されます。恩師でもあります初代会長の中垣正幸先生以来、歴代の会長のもとで築き上げられた体制を引き継ぎ、「人工膜と生体膜の融合」を目指して、7年後の設立50周年に向けて、以下の4本の柱を軸に、少しでも活動に貢献できればと考えています。

1. 年会・膜シンポジウム

学会活動の基本は、何と言っても年会と膜シンポジウムです。ウィズコロナ・ポストコロナの時代に、両者をいかに運営するか、そのスタイルの確立が課題になるでしょう。昨年秋の膜シンポジウム2020ははじめてオンラインで開催され、成功裏に終了しました。本年6月の第43年会もオンラインで実施され、多くの参加者のもと、盛会のうちに終了しましたことは記憶に新しいことと思います。特別講演、各領域のシンポジウム、口頭・ポスター発表、質疑応答は勿論のこと、貴重な情報交換の場としてのオンライン懇親会や恒例の三賞の表彰など、これまでの年会のスタイルにかなり近いものとなりました。関係の皆様方のご尽力は想像を超えるものと拝察いたします。心より感謝申し上げる次第です。今後も、コロナ下における年会・シンポジウムの開催と運営を軌道に乗せることが最優先になります。これまでに蓄積された実績とノウハウをベースに、関係各位の議論をいただきながら、また新たなスタイルの可能性を探っていければと思います。

2. 膜誌について

膜誌は、人工膜から生体膜に至る優れた総説を提供するジャーナルとして、異分野の研究者の理解に役立っています。これまでの伝統を維持しつつ、今後、i) ミニレビューなど若手による企画、ii) 対面での懇親会に代わる手段として、会員の研究分野・研究背景や研究室紹介、iii) 企業サイドからの投稿、などの可能性について、編集委員会や

産業部門委員会と連携しながら、会員の皆様への還元を図って行きたいと考えています。また一方で、膜誌は、これまで、学会・シンポジウム・講習会などの情報源としての役割も担っておりましたが、こちらは、事務局のご尽力により今ではすっかり定着しましたメールマガジンに譲ることといたします。メールマガジンの配信により、必要な情報を会員の皆様へ迅速かつタイムリーにお届けできるものと期待しております。膜誌の発行につきましては経費の面で課題を抱えており、削減に向けて知恵を絞っているところです。この辺りは今後の継続課題となりますが、将来的には、電子化に向けての議論が必要かもしれません。

3. 産業界との連携

急速な高齢化社会の到来といわゆる持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けて、学会の社会貢献・国際貢献がさらに求められています。膜学会においても、医療の高度化、カーボンニュートラル、水処理をはじめとして、貢献可能な分野も多いことと思います。幸い、本学会では産業部門委員会の活動が軌道に乗り、学会活動に産業界から多大の貢献をいただき今日に至っております。産業界の会員の皆様には、今後も、運営面も含めてなお一層のお力添えをいただければ幸いに存じます。

4. 国際化と若手の活躍

日本膜学会はICOM、AMS、ICIMなど多くの国際会議で存在感を発揮しています。2年後には、ICOM2023が27年ぶりに国内で開催されます。現在、山口猛中央副会長を中心として準備が着々と進められているところですが、本会議のホストとして、日本膜学会の一層の国際貢献が期待されます。一方で、若手による年会シンポジウムの企画、若手セッションなど、次代を担う研究者の活躍の場を進んで提供し、サポートすることも大切かと思えます。若手から経験豊富な会員に至る全ての会員の皆様が積極的に活躍のできる風通しの良い学会でありたいと願っております。

最後になりましたが、日本膜学会の43年の歴史と伝統を目の当たりにし、その会長職をお引き受けすることに身の引き締まる思いが致します。微力ですが、少しでも貢献できれば願っております。会員の皆様方には、どうかご支援の程宜しくお願い申し上げます。また、今後の膜学会の発展のために忌憚のないご意見を頂戴し、ご指導ご鞭撻いただければ幸いに存じます。